柔道整復師養成学科における学生の中途退学に関連するリスク要因：初年次の基礎学力，学修意欲および成果に着目して

松本　揚[1) 2)]，越田　専太郎[1)]

[1)] 了徳寺大学・健康科学部整復医療･トレーナー学科

[2)] 了徳寺学園医療専門学校

要旨

了徳寺大学健康科学部整復医療･トレーナー学科の入学者における中途退学率は未だ非常に高い．そのため，我々は退学を選択する学生数を減少させるための取り組みを，早期の段階から実施する必要がある．そこで本研究は，本学科の過去のデータ分析の結果から，中途退学者時期別の初年次特性を明らかにすることを目的とした．2013年度から2016年度までに入学をした学生を，早期中退群25名，後期中退群31名，卒業群266名に群分けをし，各群の1年次専門科目欠席数，1年次Grade Point Average (GPA)，英語プレイスメントテスト結果を調べた．本研究の結果，中途退学者では卒業者と比較して，1年次の柔道整復専門科目授業欠席数（早期中退群10.4±10.4回，後期退学群2.26±2.7回，卒業群1.04±1.6回）で高い値を，1年次GPA（早期退学群1.3±0.8，後期退学群2.0±0.4，卒業群2.6±0.5）および英語プレイスメントテストの結果（早期退学群56.9±19.6点，後期退学群63.8±11.9点，卒業群68.2±12.7点）で低い値を示した．特に早期退学者は，後期退学者と比較しても，基礎学力および授業参加意欲が共に低く，それに伴い1年次GPAも低くなっている可能性がある．中途退学者数を減少させるためには，これらの指標を用いて効果的に退学リスクの高い学生を抽出する必要があると考えられる．

キーワード：柔道整復師，中途退学，プレイスメントテスト，授業欠席，GPA

Identifying risk factors of the dropout in the students at the Department of Judo therapy and Sports Medicine.

Yo Matsumoto [1) 2)] , Sentaro Koshida [1)]

Department of Judo Therapy and Sports Medicine, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University[1)]

Ryotokuji Medical College[2)]

Abstract

Because the dropout rate has been high in the Department of Judo Therapy and Sports Medicine, we need to take preventive measures from the early stages of the school enrollment to lower the rate. Therefore, The objective of the present study was to identify the risk factors related to the dropout by analyzing class attendance of 1st-year judo therapist specialization course, 1st-year grade point average (GPA), and the result of the English placement test in the students enrolled in the department from academic years of 2013 to 2016. We first divided the students into three categories: the graduated group (n=266), the early dropout group (n=25), and the late dropout group (n=31). We then compared the 1st-year course attendance, 1st-year GPA, and the placement test between the three groups. In

the present result, the dropout student demonstrated lower values in all the categories than the graduated groups did. The result also suggests that the students at high risk of early dropout have remarkably low motivation towards judo therapy, leading to lower academic outcomes. We may need to pay more attention to these variables to effectively screen the students at high risk of dropout to decrease the department's student dropout rate.

Keywords：judo therapist, dropouts, placement test, class attendance, grade point average

Ⅰ．緒言

本学科整復医療･トレーナー学科では2011年度から2016年度までに558名が入学し，全体の16.4％にあたる92名が中途退学もしくは除籍となっている．文部科学省が2016年に実施した調査結果によると，全国の国・公・私立四年制大学および短期大学の中途退学率は2.12％と報告されている[1]ことから，本学科における中途退学率は非常に高いといえる．中途退学の是非について一面的に判断すべきではないが，中途退学者では，学士取得者と比較して正規雇用の機会が損なわれているのが現状である[2]．さらに授業料収入の減少や，イメージの悪化による学生募集への影響など，中途退学者の増加は大学経営にも影響を与えうる問題といえる．大学入学者の中途退学理由について，経済的な要因や学業不振，意欲の低下が複合的に関与していることが示されている[2]が，2011年から2015年度の本学科入学者における中途退学者も，「経済的理由」に加えて，「進路変更」や「学業不振（学業不振による意欲低下を含む）」などの理由を複数挙げる場合が多く[3]，全国的な傾向とほぼ一致している．これらの事実は，中途退学者数の減少には経済的支援に加えて，意欲低下に対する心理的支援や，成績不振に対する学習支援など包括的な学生サポートが必要であることを示している．

中途退学者減少に向けての取り組みとして，学生の学業不振や意欲低下の改善を支援する仕組みを構築する必要がある．これまでに，本学科ではクラス担任制度を採用し，全学生が教員からの心理的支援および学習支援を受けることができる体制を整えている．また，成績不良者に対して若手教員や助手による補助講義を開講し，学習支援の体制を強化している．先行研究[4]においてアドバイジングおよび学習支援体制の設置は，中途退学者数の減少に一定の有効性が認められているが，本学科においては中途退学者数の減少に対して十分に機能しているとはいえない．今後，さらなる対策が求められるものの，人的資源は有限であり学生に対する心理的支援および学習支援の量的拡大は困難である．そこで，我々はスクリーニングにより中途退学リスクの高い学生を入学早期の段階で同定し，人的資源をそれらのハイリスク群に集中させることで，学生支援の質的な向上を図り，中途退学者の減少につなげていくことを提案している．

立石と小方[5]は初年次の退学率は全体の中途退学率と関連することを報告しており，中途退学者減少への取り組みとして，入学早期の段階で中途退学者の高リスク者を同定する必要性は高い．ただし岩田[6]は，事例研究の結果から多くの大学において，中途退学者は1年次と4年次に集中し，中途退学の理由が異なると述べている．本学科においても，1,2年次および4年次以降に中途退学数が増大し，3年次には低く抑えられるといった双峰性が認められており，岩田の報告[6]と同様の傾向がある．さらにベネッセ教育総合研究所の調査[7][8]によると，本来入学したい大学に進学できなかった入学者，いわゆる不本意入学者や大学での目標が曖昧な学生が一定数存在することが報告されており，このような学生が早期での中途退学者となるリスクが高いことも指摘されている．これらの報告は，中途退学の要因は1,2年次での中途退学者とそれ以降の中途退学者では異なる可能性を示している．そのため，中途退学に関連する要因の同定には退学時期を考慮した分析が必要であろう．

そこで本研究は，本学科の過去の中途退学者を退学時期により群分けし，入学時基礎学力，1年次の学修成果，および柔道整復学の学習意欲を卒業者との間で比較することで，1年次の学修基礎学力，学修意欲および成果が中途退学リスク要因となるか，またそれらの結果は中途退学時期によって異なるかを明らかにすることを目的とした．本学科における中途退学者数減少に向けた対策を再構築するための基礎資料となると考えられる．

Ⅱ．方法

本研究の対象は，2013年度から2016年度までに了徳寺大学整復･医療トレーナー学科に入学した学生352名のうち，留年した学生（29名），英語プレイスメントテストを受験しなかった学生（1名）を除く322名（男性219名，女性105名）とした．なお，本研究は，了徳寺大学生命倫理審査委員会の承認を受けて実施し，対象にはオプトアウトにより参加の意思を確認した．（承認番号1920）

データ分析に際し，整復医療･トレーナー学科を1年次または2年次に中途退学した学生を早期中退群25名（男性19名，女性6名），3年次または4年次に中途退学した学生を後期中退群31名（男性19名，女性12名），4年間で卒業した学生を卒業群266名（男性179名，女性87名）として群分けを実施した．その後，任意に設定した柔道整復師専門科目の1年次授業欠席数，入学直後に実施した基礎学力テストの成績，および1年次のGrade Point Average（以下，GPA）を3群間で比較した．

本研究においては，1年次授業欠席数を柔道整復師の専門科目への「意欲」を表す指標とし，必履修科目である柔道整復師専門科目から柔道整復師の基礎について学ぶ講義4教科のうち3教科（整復医療概論，整復ケア理論軟部組織損傷学，整復ケア理論骨損傷学：1教科15コマ合計45コマ）の欠席数の合計を算出した．なお，本学の規定に従い，授業開始30分以降に入室した場合も欠席として扱った．GPAは，各々の評価に設定したグレード・ポイントに単位数をかけた成績点数の合計を履修登録した単位数の合計で割ることによって算出した（表1）．最後に，基礎学力の評価指標として，入学時に英語能力によるクラス分けの際に用いる英語プレイスメントテストの結果を用いた．本テストは100点満点で評価され，その難易度は高校1,2年程度である．なお，本プレイスメントテストは毎年同一の問題を用いていることから，入学年度の異なる学生間の英語基礎学力の比較が可能であった．

Ⅲ．結果

本研究の結果を表2に示した．1年次の欠席数において，早期退学群では他の群と比較して平均欠席数が最も多く，後期退学群と比較して4倍程度，卒業群の10倍程度の値を示した．また，平均1年次GPAおよび英語プレイスメントテスト点において，いずれも早期退学群では他の群と比較して最も低値を示し，後期退学群，卒業群の順に高くなる結果となった．

表1　Grade point average（GPA）の算出方法：成績点数より，グレード・ポイントが付与された後，以下のように算出される．

定期試験成績	100~90点	90~80点	80~70点	70~60点	60点未満
グレード・ポイント	4	3	2	1	0

※．GPAの計算式

$$\text{GPA} = \frac{\text{科目の単位数} \times \text{科目で得たグレード・ポイントの和}}{\text{履修登録した単位数の合計}}$$

表2　各群の1年次欠席数，1年次GPA，英語プレイスメントテスト平均値および標準偏差

	人数 N＝322	1年次欠席数 (回)	1年次GPA	英語 プレイスメントテスト (点)
早期退学群	25	10.4±10.4	1.3±0.8	56.9±19.6
後期退学群	31	2.26±2.7	2.0±0.4	63.8±11.9
卒業群	266	1.04±1.6	2.6±0.5	68.2±12.7

Ⅳ．考察

本研究の結果，早期退学群，後期退学群，卒業群では，1年次における柔道整復師専門科目への意欲，基礎学力，1年次の学修成果において異なる傾向が示され，いずれも早期退学者群において低くなる結果となった．本結果から，退学者数を減少させるためには1年次欠席数，1年次GPA，プレイスメントテストの結果を注視し，欠席数が多く，GPA，プレイスメントテストが低い学生に対して，早急かつ優先的に心理的支援および学習支援を行うことの必要性が示された．特に，柔道整復師専門科目の1年次欠席数については，後期退学群と比較しても早期退学群は約4倍の平均欠席数を示しており，退学時期によって顕著に異なる結果が示された．さらに興味深いことに，今回対象とした1年次の柔道整復師専門科目3科目のうち1科目でも欠席を原因とする単位未取得がみられた学生は10名のうち8名は1年次，残り2名は2年次に中途退学に至っていた一方，後期中退群と卒業群に欠席数を原因とする単位未取得がある学生はいなかった．これらの事実は，1年次の柔道整復師専門科目における欠席数が，早期退学者のハイリスク群を同定するために有効な指標となる可能性を示している．

本結果でみられた早期退学者の低い学習意欲は，柔道整復師資格取得へのコミットメントの程度と関係しているかもしれない．文系学部などと比較して，本学のような医療・保健分野の大学においては入学者の目的意識が高く，入学者の希望と実際の学習内容との乖離が小さいと考えられている．ただし，ベネッセ教育総合研究所の調査[7) 8)]は，AO入試による入学者の84.9％が第1志望校に入学できたと回答しているにも関わらず，転学や中途退学の意向を示す学生が各々約20％から30％存在し，特に退学意向を示す学生においては，将来の明確な目標がなく，学ぶ意識の曖昧な学生が多いことを指摘している．本学科においても，例年AO入試よる入学者が全体の半数以上を占めており，本学科入学時から柔道整復師資格取得に対するコミットメントが低い学生が一定数含まれている可能性は否定できない．また，本学科では柔道整復師の他に，公益財団法人日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナーや，中学校・高等学校保健体

育教諭免許など複数の資格取得機会を得ることができるという特徴がある．そのため，入学時に興味関心の中心が柔道整復学ではない学生が含まれることも多く，実際にこのような学生において柔道整復師に対する学習意欲が低くなった事例をいくつか経験している．このようにAO入試による入学者率が高い，様々な資格取得が可能であるといった本学科の特徴が，入学段階においてすでに柔道整復学への学習意欲が低い学生が存在することと関係しているかもしれない．

1年次GPAおよび英語プレイスメントテストにおいても，早期退学者群で最も低い値となり，後期退学者群，卒業者群の順で平均値が高くなる傾向であった．1年次GPAについては，後期退学者群も平均2.0と低値を示しており，退学時期に関わらず中途退学者は講義内容の理解が進んでいなかった．本学の資料においても「学業不振」が退学理由として高い割合を示しており，中途退学者数の減少に向けて成績不良の学生に対する学習支援することの重要性を裏付ける結果となった．また，中途退学者群は英語プレイスメントテストにおいても，卒業生と比較して低い値を示していることから，中途退学のリスクの高い入学者を入学後かなり早期の段階でスクリーニングできる可能性がある．ただし，松本らと越田[3] の事例研究は，プレイスメントテスト得点と中途退学の有無との間に明確な関連は認められなかったことを報告している．つまり，基礎学力が本学科における学生の中途退学に及ぼす影響は限定的であるかもしれない．ただし，本研究では基礎学力の指標として英語テストのみを用いているため，基礎学力全体を評価できているわけではない．今後，基礎学力と早期退学の関連についてはさらに研究をすすめる必要がある．

今回の結果から，本学科において，1,2年次の中途退学者を減少させる取り組みとして，プレイスメントテストや専門科目欠席数によるスクリーニングを実施し，中途退学リスクが高いと考えられる学生に対しては，早期段階から心理面及び学習面に関する介入を集中的に行う必要があることが示された．これまでにも多欠席者への対応による中途退学者減少の有効性が，いくつかの事例で示されている． 岩崎[9] は，一定期間に理由なく3回連続して欠席した学生に対して面談を実施する制度を導入した結果，6％近い中途退学率が5年後に4％台に低下したことを報告している．さらに，岩崎ら[10] は担任制度および月に一度の徹底した面談義務を導入した大学において，4年後に，入学1年目の中途退学率が6％から1.4％に減少し，入学者全体の中途退学率も25％から10.4％に減少した事例を報告している．本学科においても，1年次専門科目欠席数が目立つ学生に対する面談の徹底により，特に早期段階での中途退学者を減少させることができる可能性がある．また，不本意入学者や目的が曖昧な入学者を低減させる取り組みとして，入学前教育や初年次教育に積極的に取り組み，入学後に大学との不適合を感じた学生の初年次退学率を減少させることができた事例も報告されている[11]．本学科においても入学前教育，初年次教育の充実が，中途退学者減少に向けた取り組みとして重要であると考えられる．

中途退学の理由には「経済的理由」や「健康上の理由」が含まれ，それらが複合的に関わり合っていることがわかっている[5]． そのため，心理的支援や学習支援のみではなくさらに多方面からの対策が必要であろう．例えば，大学生活への不適応が生じた学生に，中途退学ではなく一旦休学させる対処教育的対策がある．藤原ら[12] は，休学と復学支援に取り組んでいる大学では，中途退学率が低い傾向がみられたことを報告しており，休学した後に復学しやすい環境作りが，就学継続に有効であることを示唆している．特に経済的理由や健康上の問題などを抱えている学生に対しては，一定期間の休学が，最終的に学位取得を促す有効な手段となる場合もあるだろう．本学科においても復学支援の体制を整備し，学生の選択肢を増やすことが中途退学者数の減少につながるかもしれない．今後の取り組みとして，検討していくべき視点であろう．

V. 結論

本研究の結果，本学健康科学部整復医療・トレーナー学科における中途退学者では卒業者と比較して，1年次の柔道整復専門科目授業欠席数が多く，1年次GPAおよびプレイスメントテストの結果がいずれも低いことが示された．このことから中途退学者を減少させる取り組みとして，基礎学力や1年次から授業出席意欲の低い学生に対しては，早期から心理的および学習面の介入を行うことが求められる．

参考文献

1）白川優治，大島真夫，黄文哲：第4章大学における授業料滞納・中途退学・休学の状況　大学調査の結果から．文部科学省先導的大学改革推進委託事業「経済的理由による学生等の中途退学の状況に関する実態把握・分析等及び学生等に対する経済的支援の在り方に関する調査研究」，文部科学省ホームページ，https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/__icsFiles/afieldfile/2016/08/02/1371455_2.pdf（2020.10.9.18:00　アクセス）

2）独立行政法人労働政策研究･研修機構：大学等中退者の就労と意識に関する研究，厚生労働省ホームページ，https://www.jil.go.jp/institute/research/2015/documents/0138.pdf（2020.10.5.18:00　アクセス）

3）松本揚，越田専太郎（2020）了徳寺大学健康科学部整復医療・トレーナー学科における入学時英語基礎学力と修学状況との関連：後ろ向き分析．了徳寺大学研究紀要．14．105-109.

4）岩崎保道，薩久孝政，谷ノ内識ほか（2016）中途退学の防止についての一考察．高知大学教育研究論集．20．49-60.

5）立石慎治，小方直幸（2016）大学生の退学と留年．高等教育研究．19．123-143.

6）岩田弘三：第3章大学訪問調査．平成27年度文部科学省大学改革推進委託事業「経済的理由による学生等の中途退学の状況に関する実態把握・分析等及び学生等に対する経済的支援の在り方に関する調査研究」，文部科学省ホームページ，https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/__icsFiles/afieldfile/2016/08/02/1371455_1.pdf（2020.10.29.17:00　アクセス）

7）ベネッセ教育総合研究所：第2章大学生活について．ベネッセ教育総合研究所ホームページ，https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/2012/hon/pdf/data_10.pdf（2020.11.27.16:00　アクセス）

8）ベネッセ教育総合研究所：第3回【ベネッセ研究員より】大学1年生の転学・退学の意向とその処方箋．ベネッセ教育総合研究所ホームページ，https://berd.benesse.jp/berd/focus/4-koudai/activity3/（2020.11.27.16:00　アクセス）

9）岩崎保道（2015）大学における休・退学防止の検討-学内組織連携型の学生支援策に注目して-．関西大学高等教育研究．681-86.

10）岩崎保道，薩久孝政，谷ノ内識ほか（2016）中途退学の防止についての一考察．高知大学教育研究論集．20．49-60.

11）浜崎央，片庭美咲，松本美奈ほか（2013）初年次の退学率減少につながる入学前教育：教職共働によるIRの成果．松本大学研究紀要地域総合研究．14．57-66.

12）藤原朝洋，富永ちはる，押味京子（2013）．大学における休退学の現状・対策・課題の検討-37大学の現状と取組-．九州共立大紀要．第4巻．第1号．11-18.

2021年１月19日　受理